

自己の確立へ : 「衣服」から読むSong of Solomon

河野, 世莉奈
九州大学大学院 : 博士課程

<https://hdl.handle.net/2324/1909551>

出版情報 : 九大英文学. 59, 2017-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :

自己の確立へ——「衣服」から読む *Song of Solomon*

河野 世莉奈

はじめに

Toni Morrison の第 3 作 *Song of Solomon* (1977)は、主人公である黒人男性 Milkman Dead の祖先のルーツを探る旅を経て得られる自己の成長が主なテーマとなっている。第 1 作 *The Bluest Eye*(1970)、第 2 作 *Sula*(1973)が女性を中心に据えた物語であったことを踏まえれば、Morrison が本作品において男性主人公を設定していることは注目すべき点であろう。本作品は Morrison が彼女の父親の死後に執筆したもの(*Song of Solomon* xi)¹であることから、本作品には父親の影響が大きいことが窺え、Morrison 自身が、本作品では「男性に“dominion”と“surrender”の方法を学ばせたかった」(Koenen 75)と述べていることから、女性よりも男性の方が重視されている作品であることは明らかである。しかし本作品以前/以降の Morrison 作品のほとんどが女性を中心に据えた物語であり、彼女たちが一貫して自由の探求を課題としていることを考えると、本作品における女性表象も決して見逃すことはできない。²

本作品における登場人物たちが一貫して苦しめられるのは、Milkman の父 Macon の「物を所有しろ、人を所有しろ」(55)といういわゆる物質至上主義と個人主義、自己中心主義の概念や、Milkman の母 Ruth の父親の、「娘を召使

¹ Morrison は“I had no access to what I planned to write about until my father died.” (*Song of Solomon* xi)とも述べている。また、主人公を男性に設定したことについては、“Yes, it had to be a man. Men have more to learn in certain areas than women do.” (Koenen 75)と述べている。

² Nellie McKay も、本作品における女性登場人物の重要性について、以下のように述べている。“In *Song of Solomon*, the fictive world shifts from that of black women in their peculiar oppression to that of a young black man in search of his identity. But Milkman Dead lives in a world in which women are the main sources of the knowledge in which women are the main sources of the knowledge he must gain, and Pilate Dead, his aunt, a larger-than-life character, is his guide to that understanding.” (McKay 139)

のように扱う」家父長制の概念であることはよく指摘されてきた。³本作品の本筋である Milkman をはじめとする他の登場人物の自己の成長は、その男性が定めた枠組みからの脱却とともに達成される、と言ってよい。そしてさらにここで注目したいのは、その自己の成長が、彼らが纏う「衣服」の描写と密接にかかわっている点である。*Playing in the Dark*(1992)の中で、Morrison は以下のように述べている。

The flight from the Old World to the New is generally seen to be a flight from oppression and limitation to freedom and possibility. . . . Whatever the reasons, the attraction was of the ‘clean state’ variety, a once-in-a-lifetime opportunity not only to be born again but to be born again in new clothes, as it were. The new setting would provide new raiments of self. (Morrison 34、イタリックは引用者による)

この引用は、アメリカがどのように夢を抱き前進していったか、について論じられている部分であるが、特にイタリックの部分、「旧世界から新世界への脱出は抑圧と制限から自由と可能性への脱出とみなされる」、そして「新しい背景は自我の新しい衣服を供給するだろう」という Morrison の言葉は、本作品における登場人物たちが新しい世界へ飛び出そうとする際の「衣服」の描写と呼応する。そこで、本稿では、本作品における様々な描写の中でも非常に印象的に描かれる「衣服」に焦点を当てつつ、複数の登場人物の自己の確立へ向かう姿を考察してみたい。

これまで Morrison 作品における登場人物の身につけている物についての言及は多くなされてはきたものの、「衣服」という観点から本作品を読みといたものはあまり例を見ない。一つ挙げるとすれば、Mary Jane Lupton による、“Clothes and Closures in Three Novels by Black Women” (1986)という論文がある。Lupton はこの論文の中で、Jessie Fauset の *Comedy: American Style* (1933) と Alice Walker の *The Color Purple* (1982)、そして Morrison 第4作 *Tar Baby* (1981)の3作品における「衣服」の描写を分析し、これら3作品の中では、

³ たとえば、“Macon has come to believe that money, property and keys are the only things that are real; his financial success has cost him capacity or communication and compassion.” (Smith 45)という指摘がある。

「衣服」を登場人物が、人種やジェンダーのしるしとして、そして自己の変化の手段として、効果的に使用している、と指摘している。ファッションとは「他人がじぶんにたいして抱くイメージ、じぶんがじぶんをそこへ挿入するセルフ・イメージのモデルを提示する」(鷲田 237) ものであり、ひとは『『服装』により自己の確認を試み、それを客観である他者の眼に伝達し、『服装』を通して自己のルーツを表現」(落合 271) するために「衣服」を纏うのである。このことから、本作品において、登場人物がどのような服を着て、どのように自己を表現し、男性優位の社会を生き抜いていこうとしているのかは、大変重要なテーマであるといえるだろう。

まず、1 章において、先述した父 Macon の物質至上主義と個人主義、自己中心主義、といった価値基準を確認したい。そしてその価値観に影響されていた Milkman を「衣服」の点と絡めて考察する。続いて 2 章において、Dead 家の女性たちと彼女たちの纏う「衣服」の描写に注目する。そして 3 章において、Milkman の叔母である Pilate と、その孫娘であり Milkman の長年の恋人でもあった Hagar と「衣服」の関係性に焦点を当てる。本作品において Milkman をはじめとする登場人物たちは、とらわれてきた男性基準の価値観からそれぞれ抜け出し新しい世界へと飛び出そうとする際、新たな「衣服」を身に纏うのである。

1. 「衣服」から読む Macon と Milkman

まず、Milkman の父 Macon の物質至上主義と個人主義、自己中心主義の概念を考察したい。その概念は、Macon が息子 Milkman に対して生きる上で重要なことを教えようとする場面にはっきりと示されている。

After school come to my office; work a couple of hours there and learn what's real. Pilate can't teach you a thing you can use in this world. Maybe the next, but not this one. Let me tell you right now the one important thing you'll ever need to know: *Own things. And let the things you own own other things. Then You'll own yourself and other people too.* Starting Monday, I'm going to teach you how. (*Song of Solomon* 55、イタリックは引用者による)

イタリックの部分にあるように、彼は物を所有するだけでなく、人をも所有物としてみなす。当時まだ10代前半であったMilkmanにとってこの教えは、彼の人生に多大な影響を及ぼすこととなる。父Maconがこの場面のあと、“Macon was delighted. His son belonged to him now and not to Ruth” (63)とあるように、自分の所有物として息子をみなすようになっていくことは興味深く、一方のMilkmanも、“... he couldn’t help sharing with Macon his love of good shoes and fine thin socks. And he did try, as his father’s employee, to do work the way Macon wanted it done.”(63)という描写があるように、自然と父親の価値基準に見合った男性になっていくのである。そして彼は“his father’s employee” (63)として働いていくうちに、女性に対する考え方も変えていく。彼は22歳になったときに母親を“a new light” (64)で見るようになり、“a frail woman content to do tiny things; to grow and cultivate small life that would not hurt her” (64)であるとし、“a person, a separate individual”(75)として考えないようになってしまう。このように、Maconが息子に押し付けた価値観には強力なものがあつたのである。

ここで、Maconの「衣服」に対する関心について述べておきたい。彼は裕福な黒人家庭を築きあげていることに誇りを持っており、その立派な社会的地位を守るために家族の纏う「衣服」に敏感に反応する。たとえば、Maconが妹Pilateに対して批判をする箇所が挙げられるだろう。兄Maconは、妹を“... Pilate continued to visit, *her shoelaces undone, a knitted cap pulled down over her forehead*, bringing her foolish earring and sickening smell into the kitchen. . . .” (19–20、イタリックは引用者による)と描写し、彼女に対して以下のように発言する。

“Why can’t you dress like a woman?” He was standing by the stove.
“What’s that sailor’s cap doing on your head? Don’t you have stockings? What are you trying to make me look like in this town?” He trembled with the thought of the white men in the ban—the men who helped him buy and mortgage houses—discovering that this raggedy bootlegger was his sister. That the propertied Negro who handled his business so well and who lived in the big house on Not Doctor Street

had a sister who had a daughter but no husband, and that daughter had a daughter but no husband. (20、イタリックは引用者による)

興味深いのは、彼が妹にぶつけた言葉がすべて彼女の行動に対するものではなく、彼女の「衣服」に関するものであった点である。「なぜ女性らしい格好ができないのか？」と問いかける兄 Macon の言葉からは、「衣服」が相手に与えてしまう印象がどれだけ重要なものであるのかを彼が強く意識していることがわかるだろう。Pilate の、ストッキングを履かずして、船乗りの被る様な帽子を身につけるといった、いわゆる「女性らしさ」からは程遠い格好が、どれほど兄である自分にとって都合の悪いものであるのかをここで彼は主張しているのである。このように、Macon の中で、「衣服」と社会的地位を守ることが密接に結びついていることは明らかである。⁴

そんな Macon の元で長年働いてきた Milkman は、「衣服」の点でも多大な影響を父親から受けている。彼と「衣服」の関係については、祖先のルーツを探る旅における描写がよく言及されるが、ここでは Valerie Smith の言及を例に挙げることにする。

When Milkman arrives in the South, he wears an expensive, tasteful outfit . . . He ruins and loses various articles of clothing and jewelry as he looks first for gold and then for the story of his family. Indeed, just before his epiphanic moment in the forest, he has changed from his cosmopolitan attire to overalls and brogans. (Smith 50)

南部に到着したときの Milkman は、“beige three-piece suit, his button-down light-blue shirt and black string tie, and his beautiful Florsheim shoes had already brought” (227)を身に着けていたのだが、“His [A short chubby man’s] eyes ran rapidly over Milkman’s clothes” (229)という描写もあるように、南部にはそぐわない恰好を

⁴ この引用部分に関しては、Valerie Smith も、“he eschews her company because her attire and deportment fail to fulfill mainstream expectations for the conduct and appearance of respectable women. He fears that his own professional image and relationships with white bankers will be tarnished by any association with his sister, a pants-wearing bootlegger.”と指摘している。(Smith 45)

していたようである。しかし、Smith の指摘する“his epiphanic moment”、つまり Milkman がこの世界において何が大事で何が必要なことか、これまで Macon の価値観にとらわれていたことに無自覚であった自己を顧みることができるようになるいわば自立と回復の瞬間を迎える直前に彼はそれまで身に着けていた「衣服」を替える。⁵このように、「衣服」は自己に何らかの変化をもたらす前兆となる一種の記号として使われている、とも言えるだろう。そしてこのことは、もちろん、本作品における女性たちにも見られることである。彼女たちの「衣服」の描写を読み解くことで、これまでの彼女たちの評価とは異なる面を見出すことが可能となるのである。

2. 「衣服」から読む Dead 家の女性たち

では、Dead 家の女性たちに焦点を絞っていきたい。本作品における女性登場人物については、主人公 Milkman の叔母 Pilate を除けば、自立とは程遠い女性たち、との評価をされてきた。本作品における女性登場人物は「男性中心の家父長制の世界からは締め出されている女性たちである」(Peach 171)、との見方が強かったのである。しかし、「衣服」の描写を通してみると、一見 Macon の支配下におさまっているように思える彼女たちの抵抗が明らかとなってくる。

まず、Macon の妻 Ruth についてであるが、彼女の「衣服」は、前章で述べた Macon の批判の対象であった Pilate の粗野な「衣服」とは対照的に描かれる。作品冒頭、1 章の Robert Smith という男が飛び降り自殺を図ろうとしている場面に注目したい。

The singer [Pilate], standing at the back of the crowd, was as *poorly dressed* as the doctor's daughter [Ruth] was *well dressed*. The latter had on a neat gray coat with the traditional pregnant-woman bow at her navel, a black cloche, and a pair of four-button ladies' galoshes. The singing woman wore a knitted navy cap pulled far down over her forehead. She had wrapped herself up in an old quilt instead of a winter coat. Her head

⁵ この Milkman の自立と回復に達する瞬間については、彼が「もう足を引きずらない」(藤平 123)点、「不思議な高揚感とともに自分がもうびっこを引いていないのを見出す」(大社 131)点などを指摘している者もいる。

cocked to one side, her eyes fixed on Mr. Robert Smith, . . . (5-6、イタリックは引用者による)

Ruth が伝統的な妊婦のベルトをお臍のところで縛った小ざれいなグレーのコートに身を包み、4 つボタン付きの婦人用オーバーシューズを履いている一方で、Pilate は額が隠れるまで深く、ニットで編まれた帽子をかぶり、冬のコートの代わりに古いキルトを身に纏っている。つまり、Ruth は洗練された格好をしている女性として、そして Pilate の方は、みすばらしいものを着ている女性として描写されている。このことは、Ruth が裕福な暮らしをしているだけでなく、彼女が1章で述べた夫 Macon の「衣服」に対する姿勢をしつかりと理解し、その基準にはまった格好をしているという様にも考えることは可能であろう。⁶

しかし Dead 家の恒例となっていた日曜の午後的高级車での外出の描写からは、夫 Macon が裕福な黒人であることを他の黒人に見せつけ、優越感に浸ることで安心感を得ようとしていたことはもちろん、Ruth も夫のその傾向に同調していたことが明らかとなる。

These rides that the family took on Sunday afternoons had become rituals and much too important for Macon to enjoy. For him it was a way to satisfy himself that he was indeed a successful man. It was a less ambitious ritual for Ruth, but a way, nevertheless, for her to display her family. (31-32)

先行研究においても、この高級車での外出は「ほかの黒人たちに見せるための家族の車でのパレード」(Demetrakopoulos 51)であったと指摘されるように、Macon にとっては自分が成功した男性であることを再確認するためのものでもはや儀式と化しており、Ruth にとってはそれほど野心的な儀式ではないも

⁶ 彼女たちの「衣服」の描写は度々比較して描写される。以下もその例の1つである。ここで教養や階級差も「衣服」のレベルと呼応している点は興味深い。“They were so different, these two women. One black, the other lemony. One corseted, the other buck naked under her dress. One well read but ill traveled. The other had read only a geography book, but had been from one end of the country to another. One wholly dependent on money for life, the other indifferent to it.” (*Song of Solomon* 139)

の、家族を見せびらかす手段となっていた。彼女は、息子 Milkman に対しても、14 歳になるまで直接乳を吸わせることを強要し、そのことで自分の存在価値を確認していた。つまり Ruth も Macon と同様、「人を所有できる」という概念にとらわれていたことは否めないのである。しかし、彼女は「夫に対する復讐の仕方を知っている」(Brenner 103)とも評されるように、Ruth にはあえて受け身に徹することで、Macon に自分の愚かさを気づかせないという抵抗の手段を取っていた可能性がある。次の場面からは、その可能性が読み取れる。

... because the fact is that I am a small woman. I don't mean little; I mean small, and I'm small because I was pressed small. I lived in a great big house that pressed me into a small package. *I had no friends, only schoolmates who wanted to touch my dresses and my white silk stockings.* But I didn't think I'd ever need a friend because I had him. (124、イタリックは引用者による)

ここで Ruth が“package”という単語を使って自分のこれまで置かれてきた境遇を表現している点は興味深い。彼女はそういった自分に対する周りの反応も理解していたのである。この部分については、偽りの、しかし利己的に他人のために生きる人間が描き込まれている。しかしそれは、Sula のような“Me-ness”に至る女性ではなく、また Eva のような自分で家を建てる様な女性でもない。Ruth は父の家を受け入れる事を選び、その小さなパッケージに自分をしまい込むことを選んだ」(Samuels 7)という指摘もあるように、彼女は男性の所有物である家、車、そして男性が意図する「衣服」に身を包みながら生きてきた。また、イタリックの部分にあるように、彼女の同級生は彼女のドレスや絹のストッキングにしか興味はなく、Ruth 個人は注目されることはなかった。街でも、“Dr. Foster's daughter” (67)としてしか認識されていなかったのである。つまり、家だけでなく「衣服」や車も、彼女が夫に従属的な存在であることを強調させるものとして提示されているのである。そのことを象徴するように、彼女には新たな「衣服」を纏う姿は見られない。このことは、彼女が夫の従属的存在に徹していることを暗に示しているともいえるのではないだろうか。

Macon は、2 人の娘、Lena と First Corinthians にも、立派な身なりをさせることに気を掛けていた。先述した日曜の午後的高级車で外出については、彼女たちにとって“genuinely happy”(31)なものであった、とあるように、幼少時代の彼女たちに父親の行動の真意を掴むことは出来ていなかったようである。しかし、それから 20 年ほど経ってから、Lena が、幼少時代に白いストッキングを履かされ、リボンをつけられ、手袋をはめさせられ、裸足で上半身裸で汚い、黒人の子供たちが居る所へ父に連れて行かれたときのことについて弟の Milkman に話す場面に注目すると、Lena の父親に対する認識に変化が見られることが明らかとなる。そのときには 45 歳になっている彼女は、当時の父 Macon の行動を振り返り、「自分達を着飾って、見せびらかすためにわざわざそのような子どもたちが居るところに連れて行った」(216) のだ、と言い、これまでの父親の振る舞い方に留まらず、Milkman に対しても非難の言葉を浴びせかける。

“Our girlhood was spent like a found nickel on you. When you slept, we were quiet; when you were hungry, we cooked; when you wanted to play, we entertained you; and when you got grown enough to know the difference between a woman and a two-toned Ford, everything in this house stopped for you. You have yet to wash your own underwear, spread a bed, wipe the ring from your tub, or move a fleck of your dirt from one place to another. And to this day, you have never asked one of us if we were tired, or sad, or wanted a cup of coffee. You’ve never picked up anything heavier than your own feet, or solved a problem harder than fourth-grade arithmetic. Where do you get the *right* to decide our lives?”
(215、イタリックは原文ママ)

彼女は「私たちの少女時代は、まるで拾った五セント白銅貨みたいに惜しげもなく、あなたのために使われてしまった」、といかに自分が Milkman の為に犠牲を払って生きてきたか、を直接訴える。この場面は「Morrison の英雄崇拜に対する侮蔑を強調している」(Brenner 103)とも評されるように Lena が唯一見せた抵抗の場面であるが、彼女は父の元からは脱することには成功し

ない。

一方、妹の Corinthians は教養もあり、外へ働きにも出ている女性として描かれる。通勤のときには、ハイヒールを履き、靴の袋や、エプロン、ユニフォームを持つ代わりに本を一冊持って移動し、職場に着くやいなや青い作業着に着替え、ローファーに履き替えることを習慣としていた。そしてその通勤途中において、Henry Porter という男性と出会うのである。この Porter はその暮らしぶりから、Dead 家にはそぐわない人物であり、父 Macon が猛反対をしている、との描写もあるが、物語の最終部分において、彼女はついに家を出て、彼と一緒に住む。つまり、父親の元からは離れることに成功するのである。この彼女の姿は、「personal freedom を求め、Porter と恋に落ちて、弟などの世話人であることをやめ、父親の地位からも離れた」(Samuels 24)姿である。このように Corinthians においては、母と姉とは異なり、新たな「衣服」を身に纏う行為を見せ、新たな世界へ飛び出していく姿が見られる。

以上のように、Dead 家の女性たちの「衣服」の描写は、彼女たちが Macon の街での裕福な黒人としての社会的地位を守るためのいわば道具として、扱われていたことを明らかにしている。これまで、特に Ruth と Lena は、「パーソナルアイデンティティをもっていない」(Samuels 7)女性としての評価を多く下されてきたが、彼女たちもそれぞれ抵抗の姿勢は見せていたことは述べた通りである。彼女たちは新たな「衣服」を身に纏うことはなく、枠の中で生き続ける。しかし「衣服」を替えることが強調される次女 Corinthians は、父の支配下から抜け出す、つまり新しい世界に飛び出すことに成功するのである。次章では、主人公 Milkman の叔母 Pilate と、その孫娘であり、血縁関係にある Milkman の恋人でもある Hagar に焦点を当てたい。

3. 「衣服」から読む Pilate と Hagar

Morrison は Bessie W. Jones とのインタビューにおいて、Pilate は「男性と女性の特徴がよく混ざった人物」(Jones 185)であり、兄 Macon とは真逆の、「所有することに何ら興味を持たない、虚栄心のない人物」(Jones 185)である、と肯定的な評価をしている。このことも作用して、Pilate は“independent”な女性としてこれまで評価されてきた。⁷一方で、Hagar は「家父長制社会へ

⁷ Pilate の孫娘 Hagar の髪の詳細について論じた Bertram D. Ashe は、本作品において

の適応」(Awkward 107)をしようとしている女性である、とか、「どのように女性が見えるべきか、何が男性にとって魅力的なのか、というブルジョワ社会の見方に影響を受けやすい」(Ashe 191)、「最も弱々しい」(Samuels 25)女性であるといった、どちらかと言えば、否定的な評価をされてきた。本章では、この対照的な評価を下される2人の、それぞれ男性基準の社会に対峙する姿を「衣服」という観点から読み解きたい。

まず、Pilate には臍がない、という身体的な特徴がある。臍がないということは、「胎児のときでさえ生命維持のために他の誰かを頼る必要がない、ということを暗に示しており、この特徴は彼女の完全なる自立を象徴している」(Smith 47)ということはひとまず言えるであろうが、ここで注目したいのは、彼女の「衣服」への関心である。彼女は“The people in her hometown remember Pilate as a pretty woods-wild girl that couldn’t nobody put shoes on.” (234) とあるように、前章で触れた Ruth とは異なり、他人に「靴」を履かされたくはない、という強い意志を持った少女であった。「足にフィットする」という理由で自ら“Jemima shoes”を選び、履いていたのである(224)。そして髪を切り、“outrageous”な服装(149)をするようになっていく。このように自ら「衣服」を取捨選択してきた彼女は、一貫して変わらない服装をする女性として描かれる。たとえば、第1章で触れた Ruth と対照的に描かれていた場面で被っていた“a knitted navy cap” (5-6)をクライマックス部分でも、再び身に着けている描写がなされており(334)、Milkman が初めて Pilate に出会う場面において身に着けていた“a long-sleeved, long-skirted black dress”と「靴ひものない男物の靴」(36)を再びクライマックス部分においても身に着けている(334)。他の女性たちや男性たちが「衣服」に対して意識的な社会の中で、変わらぬ服装をし続ける Pilate の姿は、彼女が社会の枠にとらわれない女性であることをも示していると言えるだろう。

しかし、彼女が父親の幻影を見、父親の声を幻聴していたことや、父がつけた名前の入ったイヤリングを常に身に着けていたことを踏まえると、彼女も Ruth と同様父親という枠組みから逃れられない女性であったと言えるかもしれない。その父親の骨を埋めに行くとき、彼女は「ミンクのストール」

Pilate は Hagar と対比的、“the Pilate-Hagar opposition” (Ashe 191)に描きこまれており、Pilate は“the ultimate symbol of independence” (Ashe 191)であると述べている。

(334)を身に纏っている。父親の骨を埋めたあと、“Should we put a rock or a cross on it?” (335) と言ってイヤリングを耳から引きちぎる行為は、父親に関わる全てのしがらみから解放された瞬間であると言えるであろう。その瞬間を迎える旅に出る際の彼女がそれまでになかった「ミンクのストール」を纏っている姿は、新たな世界に飛び出す前兆であると読むことができるはずである。

また、彼女は兄 Macon の価値観を揺るがした唯一の存在だった。たとえば、Macon が Pilate の家をこっそりと覗く場面で彼は、自分の生活と Pilate 達の生活とを比較し、彼女が自分と違って自由な生き方をしていること、そして自分は富裕層の黒人になろうと努力した結果、社会の様々な枠組みにとらわれてしまっていることを痛感するのである。1 章で述べたように、彼の信念は“... Own things. And let the things you own own other things.” (55)であるが、裕福な暮らしをし、高級車、従属的な妻や娘を所有することで満足感を得ているはずの彼に欠けているものがあるということを、この場面において Pilate は無意識的に兄 Macon に気付かせている。つまり Pilate の一貫して変わらない服装は、女性自体を「衣服」にみたてて、自分の思う通りの恰好をさせ、自分の社会的地位を守るための道具として扱っていた Macon のような男性に自己を省みる機会を与える可能性をも持ち得ていたのである。彼女にとっての「衣服」とは、着飾り、他人に見せびらかすためのものでは決してない。

つづけて、Pilate の孫娘、Hagar についての考察を続けたい。先述したような評価の原因の1つには、彼女の「衣服」への執着心が挙げられるだろう。本作品において彼女は「本当に可愛い洋服が大好き」(151)な女性として描かれ、彼女の「衣服」への関心の高さは度々作中に描きこまれる。その執着心は、自分を飾り立てることで、恋人 Milkman の関心をこちらに向けたい、という欲求から生まれているものだが、とりわけ彼女は死ぬ間際、つまり自分を良く見せたいという欲求が最高潮に達する場面において、「衣服」に対して異常なまでの執着心をみせるのである。

彼女の Milkman に対する愛情は、彼女がストーカーと化しているところからも明らかであるが、常軌を逸したものである。Milkman の友人 Guitar がその歪んだ愛情について Hagar を諭す場面からは、彼女がとらわれている価値観が浮き彫りとなる。

“You can’t own a human being. You can’t lose what you don’t own.

Suppose you did own him[Milkman]. Could you really love somebody who was absolutely nobody without you? You really want somebody like that? (306)

ここで Guitar は Hagar が「人を所有できる」と思い込んでいる点についているが、まさにこの概念は Milkman の父 Macon の、そして Hagar が固執している Milkman も受け継いでいる概念である。Guitar はここで“‘You think he belongs to you because you want to belong to him. . . . It’s bad word, ‘belong.’” (306) と、「人は所有するものではなく愛するものである」との教を説こうとするが、“her eyes were still empty” (307) といったように、Hagar を納得させることはできなかった。つまり彼女も、Macon をはじめとする男性が定めた枠組みにとらわれながら生きている女性である、ということである。

Milkman が Hagar へのクリスマスプレゼントに選んだものが、Hagar が以前彼に伝えていたもので、バスローブやイヤリング、パンプスであったことから、彼女が「衣服」に常に意識的であったことは明らかである。Hagar の狂気は、Milkman に別れを手紙で一方的に告げられた場面から徐々にエスカレートしていくのだが、とりわけ彼女が狂乱状態に陥るのは、Pilate が Hagar にピンク色のコンパクトを手渡し、Hagar が自ら鏡の中に映っている自分を確認する場面以降である。鏡で酷い自分の姿を確認した彼女は、このような姿で Milkman がこちらに関心を向けてくれるはずもない、という認識に至り、狂乱状態に陥る。Hagar の母 Reba、祖母 Pilate は、彼女をなんとかなだめようと、物を買って与えたり、特別な料理を作ったり、とあらゆる手段を尽くす。ここで重要なのは、最終的に彼女が、「新しい服を買に行かなくちゃ、新しい服を。私が持っている物は全部ぐちゃぐちゃだから。」(310)、と「衣服」を利用した解決策を見出す点である。

鏡で酷い自分の姿を確認した彼女が、狂乱状態に陥り、ショッピングに出かけ新しい服を買って漁る行動は、「単に外見や表面を変えることで生まれ変わろうとする試み」⁸ (Demetrakopoulos 55) であるとか、「精神的な死に向かう旅」(Awkward107) であるなどと言われてきた。しかし、S. フィッシャーが「服を

⁸ “She [Hagar] tries for rebirth by simply changing her exterior, her persona.” (Demetrakopoulos 55) と Demetrakopoulos は述べている。

変えるとき変わるのは、他ならぬ自分自身の外見であり、他人の変化を知覚するときよりもはるかにその変化に自我関与している」、つまり、身につける「衣服」は「他人に対するよりも、自分自身に対してより強力な意味を伝えるものである」(フィッシャー 134)と述べているように、Hagar は新しい「衣服」に身を包み、着飾ることでこの苦境を乗り越えようとしていたのである。

部屋にこもり、新しく買った服に身を包み、新しく買った化粧品でメイクをし、Pilate と Reba の前に姿を現れるが、その姿は見るに堪えないものだった。

At last she opened the door and presented herself to Pilate and Reba. And it was in their eyes that she saw what she had not seen before in the mirror: the wet ripped hose, the soiled white dress, the sticky, lumpy face powder, the streaked rouge, and the wild wet shoals of hair. All this she saw in their eyes, and the sight filled her own with water warmer and much older than the rain. (314)

この時 Hagar にはすでに自分の身につけているものが自分に似合っているか否か、また身なりがちゃんとしているか否か、の判別をつけることができなくなっている。私たちには「じぶんの存在の物理的な形態を変えることで自分の実質を変容させたい」(鷲田 32)という欲望があるように、彼女の行為はまさに自分を修正しようとするものであると言えるだろう。しかし、雨に打たれたことにより彼女は高熱を出し、死に至ってしまう。このように、死の間際の狂乱状態における Hagar は「衣服」の持つ力を最大限に利用し、Milkman をはじめとする他人に理解してもらうのではなく、自分で自分を肯定することで自己を満足させようと、必死に闘っていた。その姿は、自我を何とか確立させようと苦しむ女性の姿であると言えるのではないだろうか。本章の冒頭部分でも述べたが、これまで Hagar は「自立」とは程遠い女性としての評価を下されてきた。しかし、「衣服」の観点から見直すことで、否定的に見られてきた彼女の姿に新たな一面を見出すことが可能となるのである。

まとめ

ここまで述べてきたように、本作品における女性登場人物は、あらゆる手

段を使って、自己を発見し、男性が定めた枠組みの中で苦しみつつも、様々な抵抗をみせてきたことが明らかとなった。そしてその姿は、「衣服」の描写を通して見ることで、さらに浮き彫りとなってくるのである。女性自体を「衣服」のように扱う Macon に従属していた自分たちに疑問を抱きつつも現状維持を図る Ruth や Lena、そして Corinthians のように父の支配下から抜け出そうと行動する者、Hagar のように、「衣服」を道具に自己の葛藤を死の間際に見せる者、そして一貫して変わらない「衣服」を身につけ、そこから浮き彫りとなる、社会の枠にとらわれない生き方により、他人に影響をも及ぼす力を持つ Pilate がそれぞれ描きこまれているのである。

これらのことは他の Morrison 作品においても見られることである。たとえば、中期作品である *Beloved*(1987)において、主人公 Sethe が 18 年ぶりの外界との接触を図ろうとする際に一番良いドレスを着て出かける場面(*Beloved* 56)や、衣服に無頓着であった Sethe の娘 Denver が物語の最終部分において Sethe が縫った派手な「衣服」を身に纏い、外の世界へと足を一歩踏み出す場面(*Beloved* 286)などが挙げられるだろう。このように、Morrison 作品における登場人物は「衣服」を、それまでの価値観や枠組みから脱却し、自己を変える、自立へと向かうことを示すいわば道具として効果的に使用しているのである。

引用文献

- Ashe, Bertram D. “Why don’t he like my hair?: Constructing African-American Standards of Beauty in Toni Morrison’s *Song of Solomon* and Zola Neale Hurston’s *Their Eyes Were Watching God*”. *Modern Critical Interpretations Toni Morrison’s Song of Solomon*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1999. 177-93. Print.
- Awkward, Michael. “‘Unruly and Let Loose’: Myth, Ideology, and Gender in *Song of Solomon*”. *Modern Critical Interpretations Toni Morrison’s Song of Solomon*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1999. 95-113. Print.
- Brenner, Gerry. “*Song of Solomon*: Rejecting Rank’s Monomyth and Feminism”. *Toni Morrison’s Song of Solomon: A Casebook*. Ed. Jan Furman. New York: Oxford UP, 2003. 95-109. Print.

- Demetrapoulos, Stephanie A. “The Interdependence of Men’s and Women’s Individuation”. *Modern Critical Interpretations Toni Morrison’s Song of Solomon*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1999. 41-56. Print.
- Jones, Bessie W. and Audrey Vinson. “An Interview with Toni Morrison”. *Conversation with Toni Morrison*. Ed. Danille Taylor-Guthrie. Jackson: UP of Mississippi, 1994. 171-87. Print.
- Koenen, Anne. “The One Out of Sequence”. *Conversation with Toni Morrison*. Ed. Danille Taylor-Guthrie. Jackson: UP of Mississippi, 1994. 67-83. Print.
- Lupton, Mary Jane. “Clothes and Closure in Three Novels by Black Women.” *Black American Literature Forum*, Vol. 20, No. 4, Women Writers Issue (Winter, 1986), pp. 409-21, <http://www.jstor.org/stable/2904440>. Accessed 8 Feb. 2016.
- McKay, Nellie. “An Interview with Toni Morrison”. *Conversation with Toni Morrison*. Ed. Danille Taylor-Guthrie. Jackson: UP of Mississippi, 1994. 138-155. Print.
- Morrison, Toni. *Beloved*. 1987. New York: Vintage International, 2004. Print.
- . *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. Massachusetts: Harvard UP, 1992. Print.
- . *Song of Solomon*. 1977. New York: Vintage International, 2004. Print.
- Peach, Linden. “Competing Discourses in Song of Solomon (1977)”. *Modern Critical Interpretations Toni Morrison’s Song of Solomon*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1999. 159-76. Print.
- Samuels, Wilfred D. “Liminality and the Search for Self in Song of Solomon”. *Modern Critical Interpretations Toni Morrison’s Song of Solomon*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1999. 5-28. Print.
- Smith, Valerie. *Toni Morrison Writing the Moral Imagination*. Massachusetts: Wiley-Blackwell, 2012. Print.
- 大社淑子「第四章 『ソロモンの歌』——アイデンティティの追求」『トニ・モリスン 創造と解放の文学』（平凡社、1996年）103-138.
- 落合正勝「『ファッションは政治である』——モードに秘められた権力の構造」（はまの出版、1999年）
- S. フィッシャー 「5章 衣服によってからだはどのように装飾され偽装されるか？」『からだの意識』村山久美子、小松啓 訳（誠信書房、1979年）128–61.
- 藤平育子「第三章 わらべ歌の謎——『ソロモンの歌』」『カーニヴァル色のパッチワー

自己の確立へ——「衣服」から読む *Song of Solomon*
河野 世莉奈

ク・キルト——トニ・モリスンの文学』(學藝書林、1996 年) 95—146.

鷲田清一「『ひとはなぜ服を着るのか』——ファッションは《社会の生きた皮膚》である」(日本放送出版協会、1998 年)